

小さなねじ

小川未明

青空文庫

おじいさんは、朝起きると、火鉢に当たりながら、もうそのころ配達されている新聞をぐらんになっています。これは、毎朝のことでありました。

今日も、早く起きて火鉢の前にすわっていられました。外ではうぐいすの声がしていました。

「だいぶ春らしくなったな。この分では、もうじきに桜の花が咲くだろう。」と、独り言をしながら、眼鏡をかけ直して、新聞をひろげていられました。おじいさんは、お年のせいで、眼鏡がなくては、すこしも新聞がお読めになれないのでありました。そのうちに、おじいさんは、急にあわてて、眼鏡をはずして、手あたりをなでまわしながら、なにかさがしていられました。

「おじいさん、どうなさったのですか？」と、正二のお母さんが、これを見て、おききなさいました。

「いや、眼鏡のねじが、どこへかとんでしまつてな。」と、おじいさんは、おつしやいました。

「ありませんか。」と、お母さんは、すぐにそばへきて、いっしょになって、探しなさい

ました。

「なにしろ、小さいものだから、ちよつとわからないだろう。」と、おじいさんは、片方のつるがはずれて、かけられなくなった眼鏡を持ちながら、困った顔つきをしていられました。

「どうして、とびましたでしょうね。」

「こうして、毎日、幾度となくかけたり、はずしたりするからゆるんだにちがいない。いまに正坊が起きてきたら、さがしてもらいましょう。」と、おじいさんは、それまで新聞を見ることをあきらめなさいました。お母さんも、しばらく、火鉢のまわりや、畳のすきまなどを見てさがしていられましたが、とうとう見つかりませんでした。

「火鉢の中へ落ちたのではないでしょうか？」

「いや、火鉢の中へは入らないと思うよ。ころころと音がしたから。」と、おじいさんは、また身のまわりをおさがしになっていました。

「正ちゃん、早くいらつしやい。」と、お母さんは、顔を洗っていた、正二くんをお呼びになりました。正二くんは、家内じゅうでいちばんだれよりも目がよかつたからです。正二くんは、さつそくきました。

「どうしたの。」

「おじいさんの眼鏡のねじが、どこかへとんだから、よく探しておあげなさい。」と、お母さんが、いわれました。

「どんなねじなの、おじいさん。」

正二くんは、おじいさんの持つていられた眼鏡を自分の手に受け取って、片方についているねじを見ました。それは、小さな、平らな頭に溝のついていてるものでした。

「白く、光っているのだね、じや、わかるだろう。」

それから、正二くんは、熱心にへやのすみずみまでさがしたのでありました。しかし、やはり見つかりませんでした。

「どこへいったらう。おかしいな。」と、正二くんは、いくら探しても見つからないねじを不思議がりました。

「これほど探してもなければいい。」と、おじいさんは、いわれました。

「ほんとうに、おかしいですね。とんだものなら、どこかにありそうなものなのですのにと、お母さんが、いわれました。

「ないはずはないんだがな。」と、正二くんも、だいぶさがしあぐんだ形です。

「こんな小さなねじでも、ないと眼鏡が役にたため。使っているものは、平常そんなことを考えぬが。」と、おじいさんは、笑われました。

「ねじ一つの力も、大きいものでございますね。」

「ほんとうに、そうだよ。」

「たいていは、眼鏡の玉や、縁にばかり気を取られて、気のつかないねじのことなどを考えるものはありませんが……。」と、お母さんが、いわれました。

「だから、こうして、ときどきなくなると、その必要がわかって、いいことかもしれぬ。」

「おじいさん、ねじは、どこかへ入って、みんなが自分をさがして、大騒ぎをしているのを見て笑っているでしょうね。」と、正二くんが、いいました。

「ははは、そうかもしれない。」と、おじいさんが、お笑いになりました。

「ねじ、ねじ、見つかれよ。」と、正二くんはまた、さがしていました。もし、このとき、ねじが見つかったら、みんなは、どんなにか喜んだでしょう。そして、この後、そのねじをたいせつにしたでしょう。しかし、ねじは、あくまですねて、どこかに隠れて、姿を見せませんでした。おじいさんは、支度をなさって、眼鏡屋へいかれました。ちようど

まにあうねじがあつてくれればいいかと、思つていられたのです。ところが、眼鏡屋の職人よくにんは、

「ああ、ねじがはずれたのですか、ゆるむとよくとれましてね。」といつて、たくさんねじの入はいっている箱はこを持ち出だしてきました。そして、造作ぞうさくなく一つをピンセットで摘つまみ上げると、眼鏡めがねの穴あなにはめて、ねじまわしで、くるくるとまわしました。それから、つるの上あげ下ろし具合ぐあいをよくしらべてから、

「はい、これでいかがですか。」といつて、差し出さしました。

「おお、もう直なおりましたか。」と、おじいさんはこんなにすぐ直なおるものなら、あんなにさがすことはなかった。また晩ばんから新聞しんぶんが不自由ふじゆうなく読よめると思おもい、それを楽したのしみながら、家いえへ帰かえられたのであります。

翌日よくじつ、おそうじのときに、お母かあさんは、ほこりにまじつて、ごみ取りのうちに光ひかつたものを見みつけました。よく見みると、それは、みんなで大騒おおさわぎをしてさがした、おじいさんの眼鏡めがねのねじでありました。

「おじいさん。ねじがありましたよ。」と、お母かあさんが、いわれると、

「いまごろ、出でてきても、もうそんなものはいらなから、捨すてておしまいなさい。」と、

おじいさんは、答^{こた}えられました。まったく、使^{つか}い途^{みち}のないものは、ほこりと同^{おな}じであるから、あるときは、大^{だい}事^じがられたねじも、ほこりといっしょにどこへかはき捨^すてられてしまったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕はこれからだ」フタバ書院成光館

1942（昭和17）年11月

初出：「台湾日日新報 夕刊」

1941（昭和16）年6月6日、7日

※表題は底本では、「小《ちい》さなねじ」となっています。

※初出時の表題は「小さなネヂ」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小さなねじ

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>